

# チェコ人日本語学習者への発音教育

## －課題と提案－

松井 貴子

### はじめに

日本語を母語としない日本語学習者にとって、発音を学ぶ機会は多くない。日本語教育のカリキュラムでは、発音以外に学ぶことの方が、はるかに多く、また、それらの方が重視されているからである。国際交流基金と財団法人日本国際教育支援協会が運営する日本語能力試験でも、課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測るとしながら、試験科目は、言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解であり、会話やプレゼンテーションはない。<sup>1</sup>日本語の発音を学ぶことにモチベーションが上がらず、教えることに積極的になれないのも当然である。

しかし、現実の社会で日本語を使う場合、発音の質は、コミュニケーションの質を左右する。聞き取るのに努力を要する発音では、聞く側の疲労が大きくなり、仕事で使うことは難しい。聞き直し、確認する手間と時間は対話の効率を損う。

これは、非母語話者に、母語話者のような発音を求めるものでは決してない。外国人の日本語には、それぞれの母語の影響が、多かれ少なかれ残存する。学習によって習得する外国語から母語の影響を排除することは、おそらく不可能である。重要なのは、その影響を許容できる程度に収めることである。聞き手を疲弊させない発音を習得し、日本語を学ぶ教室以外の場でも、日本語を使えるようにしてこそ、日本語学習の成果である。

聞き取りに支障をきたす不正確な発音を抽出し、ピンポイントで改善することで、この目標の達成ができるのではないと思われる。

チェコでは、毎年、日本語の弁論大会が開かれ、日本語の習熟度別に、出場している。2019年の弁論大会の記録映像から、彼らが習得している日本語について、次のような特徴が見出された。

①チェコ語の強弱アクセントから日本語の高低ア

クセントへの転換が課題

②音楽を学んでいるチェコ人は日本語の高低アクセントができています

③長音が不正確<sup>2</sup>

④チェコ語の S、R と、日本語のさ行、ら行の音の弁別が必要

⑤口腔前部と頸部の力のバランスを調整するとよい

チェコ語では口腔後部で構音していることを自覚的に意識した上で、口腔前部（口まわり）に力を入れて発音できると日本語らしくなる

上記の気づきを基に、チェコ人のための日本語音声教育についてセミナー形式で提案し、チェコの日本語教師の方々と考察を進めた。

### I 発音セミナー（第一回）

セミナーの第一回<sup>3</sup>では、次のような構成内容を計画した。

- 1 日本語弁論大会出場者に見る日本語の癖
  - アクセント／一つ一つの音の強さが不均等
  - 不要な強勢アクセント
  - 韻律・拍／一音の長さが不均等
  - 音／カサタバの発音が強すぎる
  - 日本語にない母音子音での代用（さ行・た行・ら行）
- 2 癖を軽減するための提案
  - 強弱アクセントから高低アクセントへ／
  - 能謡の上音・中音・下音
  - 拍を均等に／能謡「鶴亀」「紅葉狩」
  - 母音／「いえあおう」の構音と息づかい
  - 共鳴点
  - 子音／構音時の各器官の使い方を意識する
- 3 身体の意識—視覚情報からイメージする

骨格／身体の形を作る  
 筋肉／骨をつないで動きを作る  
 内臓器官／体幹内部を満たして支える

#### 4 身体の意識—動きと呼吸

座る／坐骨を感じる  
 骨盤底を知る／呼気の圧力を感じる  
     呼吸を通す  
 内臓の存在／質量による支えをイメージする  
     満ち足りた体幹  
 横隔膜の動きを知る／吸気の骨盤底への圧力  
     と呼気の(床)反力  
 肺の大きさを知る／上端は鎖骨までである  
 肋骨の動きを知る／掌をあてて、動きを感じる  
     →姿勢が楽に変わる  
 身体の5本線／四肢の4本と体幹  
     +頭頸部の1本

#### 5 変化を起こすステップ

自分に意識を向ける  
     →自分がどのように身体を使っているか  
     認識する  
     →自分の発音をどのように変える必要があるか理解する  
     →どのように発音するか意識して、自覚的に発音する  
     →うまく発音できたときの身体の使い方を把握する  
     (言語化して記録すると効果的)  
     →母語話者がどのように発音しているか  
     身体感覚で共感して習得する  
     (身体のどこを、どのように使うか意識していると可能になる)

#### 6 日常の意識ポイント

姿勢・呼吸・構音

この回の参加者からは、よい姿勢の取り方を教えてもらったという評価を得た。これまでは、よい姿勢を取ろうとすると、筋肉(背筋、胸筋)を緊張させていたが、それとは異なる新しい感覚を得て、体幹を満たす内臓の存在をイメージすることにより、その質量感で支えを得るという方法を会得する機会とすることができたのである。

このときに使った人体模型は、参加者にとって

は、初めて見るもので、好奇心を持って見ている様子であった。そして、骨格、筋肉、内臓器官(体幹)のとらえ方を新鮮に感じているようでもあった。

それから、呼吸で肋骨の動きを感じることでできたという評価を得た。参加者の様子は、最初は一生懸命呼吸して感じなければいけないという力みが出ていたが、繰り返すうちに身体の動きに意識を向けられるようになり、変化が見えた。

また、母音の発音を再認識したという評価も得た。日本語の母音を発音するときに、一般的に多く使われる「あいうえお」と、演劇などの専門教育で使われる「いえあおう」を発音して、比較することで、「あいうえお」の言いにくさに気づいたのである。

「あいうえお」は、発音するときに、口を開ける方向が非連続で変化が大きい。それに対して、「いえあおう」には、口の動きの変化の自然な連続性がある。身体機能の点から見れば、「あいうえお」の順番での発音は、よりエネルギーを要する。

セミナー後には、質問があり、回答、提案を行った。

まず、子音の発音に関して、RとL、「ら」と「だ」が混濁するのを、どうしたらよいか?という質問があり、次のような提案を考えた。

ら行は舌先を軽く細かく繊細に使う  
 そのためには、舌の力を抜けるとよい  
 チェコ語の影響で息を強く出してしまふことを無理に抑制しない

上記を実践するためには、舌の構造と動きを知ることが必要なので、次回以降のセミナーの内容に加えることにした。

さらに、チェコ語との関連で生じる日本語発音について、チェコ人が、「ひと」(人)を発音すると、「ふと」という音になるのを、どうしたらよいか?という質問があり、これに対して、次のような提案を考えた。

「い」の母音をはっきりする  
 母音「い」で、唇をしっかりと横に引き、口の動きを省略しない)

このように、1回目のセミナーを終え、次回に向けての改善提案を考えた。

能誦は習ったことがない人が教える教材とする

には難しく、音源が必要であるという声があったので、「いえあおう」を能謡風にして、発声、発音練習することを考え、身体感覚に注目して、次のような手順で実践することにした。

呼吸（特に呼気）を制御する  
平坦な音程、一定の拍を意識する  
横隔膜の動きをイメージする  
骨盤底で圧が変化する感覚を得る  
骨盤底筋をイメージして、呼気で腹圧を使う  
頸部の呼吸筋、胸筋を緩める  
母音の発音に慣れたら、教材を「あいうえお詩」にして、レベルアップする。  
教材を、一文字ずつ発音することから始めて、音をつなげていく

現代日本語のリズムやイントネーションを練習するためならば、能のように謡うことに拘る必要はない。詩の朗読であれば、散文の朗読より、リズム、メロディを活かせる利点がある。

## II 発音セミナー（第二回）

セミナーの第二回<sup>4</sup>では、次のような構成内容を計画した。

### 1 身体を意識する

自分の身体に意識を向ける／  
一分間フォーカス  
4step／肩上下 両手上げ下げ  
固有受容感覚／片側タッピング  
MSM／片腕上げ下げ  
ネガティブ／セルフトーク

### 2 セミナー（第1回）の復習

姿勢／坐骨～寛骨～背骨＋筋肉＋内臓器官  
呼吸／横隔膜と肋骨  
母音／構音「いえあおう」

### 3 母音が響くところを意識する

い／頭頂の少し後ろあたり  
口腔、鼻腔から出る呼気の方向  
力とのバランス  
え／眉間から額のあたり  
下あごが下がる分、前方から下方方向へ、「い」の場所から移動  
あ／顎下から胸あたり  
口蓋と下あごが開いて、口腔内が広く

なる状態を支える

お／首の後ろ側から7番頸椎あたりから、  
背中の上部まで

やや圧力のある呼気が前方に出る  
身体の前面と背面のバランス

う／後頭部から背骨（頸椎、胸椎、腰椎）  
背骨に沿った縦方向の細長い範囲に呼  
気の圧力＋その反力とのバランス

### 4 舌の形態（構造）と動き

舌は、一枚板ではない  
舌の動きは、単純な上下ではない  
勾玉に似た形  
大きな底部に支えられて動く舌先  
前方に出て戻る舌の動き

### 5 母音の発音練習／母音は、すべての音の基本 拍を均等に

アクセントを平坦に

### 6 子音の発音／子音は、いつも母音と一緒に 日本語の音を作る

### 7 あいうえお詩

### 8 身体の五本線

この回では、国際的なボディメソッドであるフランクリンメソッドを応用して、自分の身体に意識をむけることを実践し、発音時の構音器官の使い方、息づかいを認識する準備をした。

具体的には、現状認識→改善の工夫を考える→実践→違いを観察する、という方法で、発音を改善することを提案し、肩を上げる下げる動きで実践した。

そして、口腔模型を使って、舌の構造、動きのイメージをつかんでもらった。これは、前回、提案のあったことの実践である。舌の形や動きを、自分の感覚で具体的にイメージできるようになる効果を狙っている。これによって舌の力が抜けると、微細な動きの調整が可能になり、自分で、子音の発音を改善できるようになるのである。

この回では、母音の発音練習のモデルを提案し、子音の発音を確認して、音のイメージを共有した。

セミナーの時間中、随時、質問が出て、活発に質疑応答をすることができた。

まず、促音の習得について、手を打ってリズムを取る補助（促音に即したター・ァ・タのリズム）

をすると促音を発音できるが、自分一人では発音することができず、促音が消えたり、長過ぎたりすることがあり、どうしたらよいか？という質問があった。

この質問に対しては、教授者が打つリズムを聞いてから、それに合わせて学習者が発音していると、合わせることに意識がいて、自分でリズムを刻むことに意識が届かないのではないかと推測された。教授者が作るリズムに合わせることで、自分でリズムを刻んだと錯覚してしまうので、自立できないのではないかとと思われる。

教授者のリズムに合わせるにしても、促音に即したリズムでは、個々の異なる音の長さを、一つ一つ把握して、それらの音の連続を、固定した一つのパターンでとらえなければならないため、実際は、かなり難しいことである。日本語らしい発音に必要な、均等拍の感覚から外れてしまうことになる。

均等拍を打ちながら、促音のある語と促音のない語（かた、かった）を交互に発音して、均等拍のなかで、促音部分をどこに置くか、自分で感覚をつかんでもらうことを提案した。

次に、文末の「す」の母音の無音化が話題となった。

関西方言では、文末の「す」の母音を、明瞭に発音する。自分の母音の発音の特徴から、関西出身であることをアメリカ人に推測されたという参加者の経験談があった。「す」の母音が無声化するときは、呼気の流れは続いているが、口の形が「う」から解放されていると感じられる。母音を明瞭に発音するときは、息のある間、口の形が保持されている。

そして、「ひと」の母音の無声化と無音化については、無音化するときは、口の形が「い」にならないこと、無声化するときは、口の形が「い」になるが、声帯が振動しないことを、それぞれの身体感覚によって確認した。

拍の均等化の課題を、次回、能謡を実践して考察することにした。

### Ⅲ 発音セミナー（第三回）

セミナーの第三回<sup>5</sup>では、次のような構成内容を計画した。

#### 1 能謡／拍の均等化

強弱の平準化

音の高低の意識化

8拍に12音（7 + 5、5 + 7）、1文字 = 1拍

上音・中音・下音 + クリ音・呂音／

音程が変わるときの運動感覚を意識する

謡の一節の間、呼気の強さ、勢いを一定に保つ

#### 2 促音のリズムの習得／能謡のカウントを応用

手を打ってリズムを取るのを補助（促音に即したター・ァ・タのリズム）すると促音を発音できるが、自分一人ではできない

促音が消えたり、長過ぎたりする

教授者が打つリズムを聞いてから、それに合わせて学習者が発音していると、合わせることに意識をとられて、自分でリズムを刻むことに意識がとどかないかもしれない

教授者が作るリズムに合わせられたことで、自分でリズムを刻んだと錯覚し、自立できないのではないかと推測される

促音に即したリズムだと、個々の異なる音の長さを、一つ一つ把握して、その連続音を、固定した一つのパターンでとらえなければならないので難しく、均等拍の感覚から外れる

均等拍を打ちながら、促音のある語と促音のない語（かた、かった）を交互に発音して、均等拍のなかで、促音部分をどこに置くか、自分で感覚をつかんでもらう

#### 3 母音の無音化、無声化の分析と改善／

構音器官の使い方と息づかい

文末の「す」の母音の無音化／母音「う」

関西方言は文末「す」の母音を、明瞭に発音する（アメリカ人に、母音の発音の特徴から、関西出身であることを推測されたという経験談があった）

無声化するときは、呼気の流れは続いているが、口の形が「う」から解放されている

発音を明瞭にするときは、息のある間、口の形が保持されている

「ひと」の母音の無声化と無音化／母音「い」  
無音化するときは、口の形が「い」になら  
ない

無声化するときは、口の形が「い」になるが、  
声帯が振動しない

→母音の口の形を明瞭に（にっこりのい）／  
構音の体勢を作ることで母音を存在させる  
有声音にならないように呼吸を調整する  
「母音の無声化」<sup>6</sup>について

か、さ、た、は、ば行で母音「い」「う」／  
無声子音には含まれる、アクセントのない  
語尾

月、菊、勝つ、です、ます（無声化する）  
いつも、ですが、ますが（無声化しない）

最終回となる三回目のセミナーは、予定してい  
た3項目 + a の内容で実施した。

まず、「鶴亀」謡について解説した後、謡を実  
践し、身体を使う実践的学習は、楽しめるという  
評価を得た。参加者の身体感覚は、平坦な音階を  
謡った後、日常の発話をする時、高低変化がある  
ことを感じられるというものであった。

チェコ人学習者のためには、「鶴亀」の詞章を、  
かな書きにすると使えるという提案を得て、かな  
とアルファベット<sup>7</sup>で詞章を書き直した。能を知  
らない人のために解説が必要という意見もあり、  
参考になる URL のリストを作成した。

次に、促音の学習について、「かう かつ 試  
合に 勝つ 牛を飼う 本を買う」「かった 勝っ  
た 飼った 買った」という語を例として考察し、  
「かった」は、均等拍の中で、促音になるタイミ  
ングが異なり、「勝った」が最も早く、「飼った」、  
「買った」の順に、遅くなるのではないかという  
仮説を得た。

そして、チェコでの日本語学習について、高校  
生や社会人は、文法や理論を優先して学ばない、  
社会人は、週1時間くらいの学習であるという現  
実があり、チェコ語母語の耳で促音や高低アクセ  
ントを聞いても、認識できないという課題がある  
ことが参加者から提示された。成人や、それに近  
い年齢での外国語学習では、第一言語のように、  
耳で聴いた音を真似て発音を習得することが難し  
いのである。

聴覚で得た情報が構音器官の動きに直結しづら  
い場合は、聴覚以外の感覚を活性化して、機能を  
補うことができる。<sup>8</sup> 構音器官の運動感覚に意識  
を向けて、それを言語化することによって、身体  
感覚の記憶を強化することで、発音の改善につな  
がる。具体的には、母語話者が聞いて、違和感の  
ない発音をしたときに、自分がどのように構音器  
官や身体を使い方をしたか、観察して、言葉にし  
て、認識することを繰り返して、定着させていく。  
構音器官の微細な動きを感知した意識的な発音で  
あることが重要である。

前回から話題になった母音の無声化について、  
母音を、チェコ語のように無音化しないで、日本  
語らしく無声化できるようにするために、母音を  
省略してもよい（有声化しなくてもよい）が、構  
音の形は作ると教えるという提案があった。

また、日本語の「ですが」が、「ですが」と、  
濁音になるのは、チェコ東部のモラヴィア方言の  
影響ではないかという意見が出された。チェコ人  
の発音で考えるべき音として、「ひ」「ら行」「だ行」  
があり、長母音と短母音の区別も課題であるとい  
う発言もあった。

さらに、参加者から、初修者が長音を認識する  
のに有効なものとして2拍フットが紹介された。  
これは、促音、長音が抜けてしまう学習者が認  
識するための方法であるが、まず、2拍フットと  
いうとらえ方そのものを理解することが難しく思  
われた。また、日本語の基本リズムである五七、  
七五調と、どのような折り合いがつけられるのか  
という疑問も感じられた。日本語の文字、語彙に  
和語、漢語、外来語（カタカナ語）が混在してい  
るのと同様に、日本語のリズム、韻律には複数パ  
ターンが混在しているのかもしれない。

#### IV チェコ人の日本語発音を変える提案

セミナーを通して得た情報をもとに、チェコ人  
が苦手とする発音を、日本語として聞き取りやす  
くするための練習法を下記のように細分化して考  
案した。

- ①「ですが」／「す」の母音が無声化すると、「が」  
の濁音に引きずられて、「ず」  
になる

母音が無声化しないと、「う」の音が  
強く出すすぎる

1. 「で」の発音を確認  
チェコ語の d の音になっていないか？
2. 母音「う」の発音を習得する  
チェコ語の u を忘れる  
日本語に適した口腔の感覚、口まわりの使い方を丁寧に反復練習して習得する
3. 「う」に、さ行の子音をつけて、「す」の発音を練習する  
今までの癖が出ないように、自分の構音に意識を向けて、常にコントロールする
4. 「ず」の発音を確認する  
チェコ語の z の音を流用していないか？
5. 「で」 + 「す」  
口の動きの変化を丁寧に意識する  
字間の長さをとらえる
6. 「で」 + 「ず」  
口の動きの変化を丁寧に意識する  
字間の長さをとらえる
7. 「が」の発音を確認する（濁音と鼻濁音を知る）
8. 「す」 + 「が」  
口の動きの変化を丁寧に意識する  
字間の長さをとらえる
9. 「ず」 + 「が」  
口の動きの変化を丁寧に意識する  
字間の長さをとらえる
10. 「ですが」「でずが」を発音する字間の比較  
「ず」のほうが短く、「す」の方が長い  
\* 「でずが」でも、「でずすが」でもなく  
「で□す□が」（□はポーズ、字間）  
「です」の後に、ほんのわずかにポーズを入れて、リセットしてから、「が」を発音する  
\* 一つの音と音の間の「間（ま）」の長さの感覚がポイント  
\* 次の音を出す前に、一瞬止まってリセットすることで、隣接音の干渉を減らす

②語頭、文頭のアクセントが強すぎて、日本語として聞き取れない  
能謡「鶴亀」を教材として使う

（一拍一音で音階の上下の少ない一節）

1. 詞章を一音ずつ発音練習
2. 音をつなげていく
3. 拍をうちながら、発音練習
4. 姿勢、呼吸、骨盤底から息を通すことを確認  
→ハミングで声を出す
5. 息を通して、いえあおう
6. 自分で拍を打ち、同じ高さの音程を保って謡う  
均等の拍で一音一音を出す感覚をつかむ  
強弱が一定するように自分でコントロールする感覚を得る

### ③強弱アクセントと高低アクセント

音の高さを変えるときに構音器官の使い方の違いを知る

1. 両腕を前に出し、手先が視界から出ない範囲で、両手を左右に開きながら、出しやすい高さの音を出す（腕の動きは省略してもよい）
2. 最初に出した声より、少し高い声で同様に声を出し、構音器官の動きを比較する
3. 最初に出した声より、少し低い声で同様に声を出し、構音器官の動きを比較する  
\* 高い音／喉が上に広がり、息が鼻に行く  
低い音／喉が下方に広がり、口から出る

### おわりに

チェコで日本語を教えている先生方と、オンラインのセミナー形式で、情報を共有し、様々に意見交換をして、課題を明確化することができ、チェコ人大学生の日本語学習者向けに試験的セミナーを実施する目途が立った。チェコ語と日本語の特徴をとらえて、これまでの日本語教育での発音教育を補完することを考え、特に、演劇での基礎訓練<sup>9</sup>を応用した提案が有効であると思われる。このようにして、チェコ人学生のための日本語発音セミナーを企画、実施することにつながった。これについては、別稿で報告したい。

本論文は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）女性教員海外派遣制度」による研究

成果である。

2020年10月～2021年3月に、チェコ共和国のパラツキー大学（宇都宮大学協定校）とオンラインで実施した。

<sup>1</sup> 日本語能力試験 JLPT HP <https://www.jlpt.jp/about/points.html> 2021・4・20日

<sup>2</sup> チェコ語でも長音が大事であるのに、なぜ、日本語の長音が正確でないのか、チェコの日本語教育では、不明であるという。

<sup>3</sup> 2020年12月6日に実施した。

<sup>4</sup> 2020年12月13日に実施した。

<sup>5</sup> 2021年1月10日に実施した。

<sup>6</sup> 川和孝『日本語の発声レッスン 俳優編』49 - 50頁。窪園晴夫監修、田中真一『日本語の発音教室 理論と練習』7 - 9頁。国際交流基金 日本語教授法シリーズ2『音声を教える』53 - 57頁。

<sup>7</sup> 以前、チェコで大学生に能舞を教えたとき、学生たちが、自分たちで詞章をチェコ語のアルファベットに書き換えて、日本語を知らないチェコ人も読めるようにしていたのを参考にした。

<sup>8</sup> 身体感覚を使うことについては、例えば、聾者が、聴覚によらずに発音を習得する方法を応用できないかとも考えられる。

<sup>9</sup> 日本語の構音、身体意識については、飯原道代氏から多くのご教示を得て、演劇の基礎訓練の方法を応用している。

## 参考文献

〈解剖学〉

坂井建雄・河原克維総監修（2005）『カラー図解 人体の正常構造と機能 X 運動器』日本医事新報社。

A. L. Kaoandji（塩田悦仁訳）（2010）『カパンジー機能解剖学Ⅰ 上肢 原著第6版』医歯薬出版。

A. L. Kaoandji（塩田悦仁訳）（2010）『カパンジー機能解剖学Ⅱ 下肢 原著第6版』医歯薬出版。

A. L. Kaoandji（塩田悦仁訳）（2010）『カパンジー機能解剖学Ⅲ 頭部 体幹 脊椎 原著第6版』医歯薬出版。

メリッサ・マルデ、メリージーン・アレン、クルト＝アレクサンダー・ツェラー（小野ひとみ監訳、若松恵子、森薫訳）（2010）『歌手ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』

春秋社。

D. A. Neumann（嶋田智明・有馬慶美監訳）（2012）『カラー版 筋骨格系のキネシオロジー 原著第2版』医歯薬出版。

石井直方監修、荒川裕志（2012）『プロが教える 筋肉のしくみ・はたらきパーフェクト事典』ナツメ社。

石井直方監修、岡田隆（2013）『プロが教える 骨と関節のしくみ・はたらきパーフェクト事典』ナツメ社。

ブランディーヌ・カレ - ジェルマン（科学新聞社出版局訳）（2014）『新 動きの解剖学』科学新聞社。

エレイン・N・マリーブ（林正健二他訳）（2015）『人体の構造と機能 第4版』医学書院。

〈呼吸・発声〉

川和孝（1981）『日本語の発声レッスン 俳優編』新水社。

半谷進彦、佐々木端（2000）『基礎から学ぶアナウンス』NHK出版。

松濤アクターズギムナジウム監修（2000）『はじめてのボイストレーニング—朗読・ナレーション編』雷鳥社。

飯島晶子（2008）『伝わる声の出し方・話し方』日本実業出版社。

永田晟（2012）ブルーバックス B - 1771『呼吸の極意 心身を整える絶妙なしくみ』講談社。

米山文明（2013）平凡社ライブラリー 730『声の呼吸法 美しい響きをつくる』平凡社。

齊田晴仁（2016）『歌う医師があなたの声をデザインする 声の科学』音楽之友社。

〈チェコ語・日本語〉

金指久美子（2007）『チェコ語のしくみ』白水社。

金指久美子（2012）『チェコ語の基本—入門から中級の入り口まで』三修社。

窪園晴夫監修、田中真一（1999）『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版。

戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク。

国際交流基金（2009）『日本語教授法シリーズ2 音声を教える』ひつじ書房。

末歌真理子、福池秋水、河野麻衣子、吉田佳世

- (2014)『まねして上達！ にほんご音読トレーニング』アスク出版。
- 木下直子、中川千恵子(2019)『ひとりでも学べる日本語の発音』ひつじ書房。
- 郡史郎(2020)『日本語のイントネーション―しくみと音読・朗読への応用』大修館書店。
- 〈能謡〉
- 観世左近(1983)『大成版 観世流謡曲百番集』檜書店。
- 渡辺睦子作画・増田正造解説(1986)『マンガ能百番』平凡社。
- 浅見眞高編著(1993)『能の音楽性と実際』音楽之友社。
- 三浦裕子(1998)〈音楽選書79〉『能・狂言の音楽入門』音楽之友社。
- 横道万里雄(2002)『謡リズムの構造と実技―能…地拍子と技法』檜書店。
- 藤波重満(2004)『よくわかる謡い方 1 鶴亀・橋弁慶・吉野天人・大仏供養・土蜘蛛』檜書店。



# Japanese Language Education for the Czech Japanese Language Learners: How to Improve Their Japanese Pronunciations?

MATSUI Takako

## Abstract

In Japanese language education, both teachers and learners treat it lightly to practice the precise pronunciation of Japanese vowels and consonants mainly because there is no oral test in the certifying examination. Accordingly, the teachers and learners feel less need for such practice. The learners consequently acquire strongly accented Japanese affected by their native languages. Such kind of Japanese interrupts smooth oral communication.

Czech native speakers stress the first syllable of almost every word, which is far different from the Japanese tonic accent, so the interference of the Czech accent makes their Japanese pronunciation hard to catch. They need to master a pitch accent with an equal beat for not speaking unnatural Japanese.

The most important thing for beginners is mastering how to pronounce the vowels. Japanese language learners should keep brushing up the skill for proper pronouncing the five vowels. That is because one of which always follows every consonant with few exceptions.

Effective learning for improving their Japanese pronunciation is that they become aware of the human body consisting of bones, muscles, and organs. And especially the movement of the diaphragm, the rib cage, and the pelvic floor because they link together in breathing. In addition, it is efficient that they understand the shape and movement of a tongue, the lips, and the oral cavity.

Then, they practice moving the organs for proper pronunciation by reading a poem aloud. I selected the poem ‘a i u e o’ by Mado • Michio as teaching material. Moreover, I use a challenging material, the Noh chant. This material must be attractive and instructive for the Czech students who attend my online seminars to modulate a rise and fall of a pitch at a fixed rhythm.

(2021年11月1日受理)